

介を城にかへしけり。大介今年十六に及ぶまで、片時もかたへを離れ候はず。たゞ今討死のきはに逃たりと、人のいはんも口惜く候。去年母上にわかれ奉りし後、文のたよりにながらへて相見んは、ねがはしけれども、合戦の場にて、必父うへと同じ枕に討死せよ、苟にも名こそをしけれと、誠められしといひければ、信仍城中へ歸れといふも、秀頼公の御ためなり、父子とも、とてものがるべきや、やがて冥途に逢べきを、まばしの別れを惜むこそ口惜けれ、とく城にまゐれとて、取つきたる手を引放せば、大介名残をしげに、父を見て、さらば冥途にてこそとて引返す。信仍大介を見おくりて、落る涙をおさへ、昨日譽田にて痛手負しが、よはる體の見えざるは、よも最後に、人に笑はれじ、心安しといひけるとかや、略○中 大介は、城中に入、秀頼に従ひて、蘆田曲輪の矢倉にこもりて、父の事を尋ねけるに、討死せしと聞て、それより物もいはず、母のかたみに賜はりける。水晶の珠敷を首にかけ、秀頼の自害を待居しかば、速水甲斐守、大介に向ひて、組討の武勇たくまじきふるまひして、痛手負れしと聞ゆ。和平にて、君も城を出させ給ふべし、真田河内守信吉の方へ、人をそへて送るべしといへども、ちつとも動かさず、略○中 大介も矢倉の中に死して、父子同じく豊臣家の爲に亡びたり。

〔明良洪範六〕淺野因幡守長治ノ家老福尾勝兵衛ハ、主人病死ノ節ハ、殉死スベシト思セ定メテ居タルニ、殉死停止ノ命令出タルバ、據ナク殉死ヲ止メ、葬送ノ供シテ家ヲ出テヨリ、再ビ家ニ歸ラズ、其マ、墓ノ前ニ蹲踞シテ、終日終夜明シ暮ス、食事モ宿ヨリ贈レバ食シ、贈ラザレバ食セズ、幾度迎ヒテ遣ハセ共歸ラズ、其心ヲ問ヘバ、我ハ殉死スベキ覺悟ナリシニ、停止ノ命令出シニヨリ、殉死ハセザレド、其心變ゼザレバ、墓前ニ伺候シテ天命ヲ盡ス也、生涯歸宅ハセザル也ト申切ル、其忠、心確乎トシテ奪フベカラズ、日數積リ雨露ニ濡テ居ケル故、此方へ御入り有レト、寺僧申サレケレド一向動カズ、式部少輔長照モ不便ニ思ハレ、寺僧へ談ジテ、廟所ノ山間へ庵室ヲ造リテ、